

アンカラ概略史

設 樂 國 廣

今日、アンカラの町を訪れる日本人旅行者の大部分は、丘の頂上に位置するアンカラ城址から少し下った斜面にある考古学博物館である。「アナトリア文明博物館」と市内の丘にあるアタチュルク廟を見学するくらいであり、約半日の観光の後、次の訪問地に向かつてしまう。しかし、アタチュルク廟建設時、同地から青銅器時代の遺跡が発掘されている。また考古学博物館の建物はキャラバン・サライであるハンを修復したものである。現在、トルコ共和国の首都として拡大を続けるアンカラは、日本ではあまり知られていないが、歴史的な都市であり、アナトリアの経済的中心のひとつとして繁栄してきた。かつて、アンカラ大学に留学した懐古として小文を著す。

アンカラの名はアンカー（錨）が語源と言われている。どこかの戦利品の錨を飾っていたのかもしれないが、意味ない議論であろう。共和国になってからはアンカラと称されているが、十九世紀末の鉄道が敷設されたころの写真には、アンカラ駅の表示はアラビア文字を併用しているがローマ文字ではアンゴラと書かれている。アンカラ周辺のみ育成していた毛足の非常に長いアンカラ山羊の毛は、アンゴ

アンカラ概略史（設樂）

ラと言われている。

アンカラの町は、今は埋め立てられているが、昔は川が流れ石橋もかかっていたベント谷の南の丘を中心に成立していた。ボズルカレーを中心とするヒッタイトの時代やミダス王が支配したゴルディオンを中心とするフリギアの時代に、その周辺都市のひとつであったアンカラは、この丘の下方の台地周辺に存在した。アンカラはアケメネス朝ペルシアの統治下にもあったが、アレクサンドロスは東方遠征の途上、この近辺を通過したと言われる。その後、新約聖書のガラティア人の手紙で知られるガラティアの中心地となった。

ローマ領となり、初代皇帝アウグストスはここに神殿を建設し、彼の業績を神殿基盤に記録した。現在のハジ・バイラムIIモスクにこの神殿の壁が接している。近接する斜面に劇場跡が発掘されたことからも、この台地の上がアクロポリスの位置であったと思われる。近くの州庁舎の前には「ハドリヤヌスの塔」も残されており、さらに下った部分からローマ風呂の跡が発掘された。

アンカラは、防衛拠点でもあったが、特に交易中心地として商業が繁栄し、活発な活動をする商人層の組織が都市運営にあたっていた。ローマ時代もアンカラは自治都市として特権を与えられていたようである。このように商人層を核とする自治組織による都市運営の傾向はオスマン時代末期まで続いたと考えられる。

東西にローマ帝国が分裂し、東ローマ（ビザンツ）帝国に属したアンカラは、アラブの進出により、最前線となったアナトリアの軍事・行政拠点となり、テマ（軍管区）制の中心となった。そのため強固

な城砦が頂上付近に建設され、アクロポリスやその下に広がっていたローマ風呂などの廃墟から大量の大理石を含む建材が運びあげられ、今日でも城壁に円柱や立像の台座や文字の書かれた石材がはめ込まれている。丘の頂上方向への市街区域の拡大はビザンツ時代以降である。

十一世紀になってアナトリアにルームセルジューク朝が成立すると、国家の中心はコンヤであり、アンカラは地方都市として、駐屯軍が城砦内に置かれた。中央アジアなどの東方から移動してきた遊牧トルコ系部族が周辺地域に夏营地や冬营地を確保した。また、一部の遊牧民はビザンツ農民の放棄した農地に定住するものもあった。しかし、トルコ系イスラム商人がアンカラでの地位を確立するには約百年を経なければならなかった。金曜日の午後の合同礼拝を行うために建設される都市部のモスクは、城砦内には、ルームセルジューク朝が支配すると、直ちにスルタンの名を冠したアラエッディーンモスクが一一九八年前の建設されたが、都市部には同業者組合であるエスナーフの長アヒーの名を冠したアヒーセラフエッティーンモスクはそれよりも百年ほど後一二九〇年ころに建設されている。そして、このモスクはアクロポリスのあった中腹の台地の上ではなく、反対側の斜面の中腹に建設されている。斜面には、上から馬市、羊市場、麦わら市場と続き、車市場が丘のすその市壁の最も低い部分にあった。トルコ系住民は、古くからの居住地である台地上ではなく、斜面に家を建てる傾向が見られる。かつては居住地として都合のよかった、アナトリア各地に見られる丘状の遺跡（テペ、ホユックなど）の上にはあまり住まず、近くの斜面に新しい村を建設することが多い。排水の設備が不十分であっても住めることが理由であろうか。

アンカラ概略史（設樂）

ルームⅡセルジュク朝時代は、アンカラは商人層のエスナーフが中心となり市の運営を担当していた。このため、オスマン朝はアナトリアの西部に建国したが、中央部のエスナーフの自治都市であるアンカラを早い段階で併合している。しかし、アンカラはオスマン化しなかった町と、後に語られるように、オスマン中央政府の影響は弱く、伝統的なエスナーフの地位は確保され、周辺の遊牧部族も部族体制を保持してオスマン朝末期まで体制を維持していたと考えられる。オスマン朝で、アンカラは州の中心都市ではない時期もあった。

敗北により、オスマン朝の空位時代を出現させるアンカラの戦いの戦場は、現在の空港あたりの、町の郊外に広がる原野であった。一四〇二年、ティムールはアナトリアの旧諸侯の復活を約して味方に引き入れ、イエニチエリ軍団とセルビア人部隊を中核とするバヤジッド雷帝の率いるオスマン軍を粉碎し、バヤジッドを捕虜とした戦いであった。しかし、アナトリアを占領したものの、オスマン朝の基盤であったバルカン半島には手をつけずに、東方の明への遠征に移ったティムールの対応によってオスマン朝は空位時代を経たものの復活し長期政権を作り出した。

オスマン時代のアンカラはアナトリア各地に展開する神秘主義教団（タリカート）の導師を輩出している。宗教的・文化的中心であったことも伺われる。また、裁判記録である（アンカラⅡシジリⅡデフテル）も残されており、これらの史料には、中央政府の官職名が、地方では独特の官職に使われているなど、地方の行政組織が独特の体制を持っていたことも伺われる。

第一次世界大戦後、一九一九年ギリシア軍がアナトリアに上陸し、さらに内陸に進撃して、アンカラ

近郊のポラツトウルまで迫ったが、ムスタファアケマル（アタチュルク）の指揮するアンカラ政府軍がこれを阻止し、最終的にはギリシア軍をアナトリアから放逐した。このとき、ムスタファアケマルは、祖国解放戦争を指導する「ルメリーアナトリア権利擁護団」の代表としてアンカラに司令部を置き、トルコ国民議会を召集してイスタンブールの中央政府に対してアンカラに議会政府を樹立していた。

さかのぼって、一九一九年十二月、シヴァスからアンカラに移動したムスタファアケマルは、新しい指導者としてアンカラ住民から歓迎された。アンカラの住民による、オスマン中央政府の州知事を追放し、英仏の戦勝国進駐軍の存在を無視して、近郷近在からの住民の動員を図ったこの歓迎方法は、オスマン朝以前のセルジुक朝などが遊牧部族の新しい指導者を選ぶ、推戴の儀式にたとえられる。すなわちアンカラ周辺に展開したトルコ系遊牧部族やアンカラ市内のエスナーフなどが、オスマン朝の権力者と異なる新しい指導者の選出を行ったと考えられる。アンカラ州知事代理がオスマン朝の大宰相に宛てた電報で「アンカラは、あなたもあなたのスルタンも承認していない」と伝えたと言われている。

トルコ共和国樹立が宣言され、名実ともに首都となったアンカラではあるが、ムスタファアケマルが到着したころは、市内に宿泊施設も少なく、ムスタファアケマルは郊外ケチョーレンの現在気象台となつた農学校に滞在した。新しい議会は、フランス軍が占領していた建設中の「統一と進歩委員会」の本部が転用され、各地から集まった代議員たちは、郊外の農園の建物に宿泊し馬車などによって移動した。また、新聞記者などには市内の裕福なユダヤ教徒の家に下宿するものもあつた。二代目の大統領になるイスメットは、アンカラに來たころ、夜になると周辺から狼の遠吠えが聞こえたと言っている。

アンカラ概略史（設樂）

その後、一九三二年にドイツ人のヤンセンによって都市計画が作成され、旧市街の南の部分に都市が建設された。商業地区、官庁街、大使館街、住宅街、文教地区などが明確に区分けされた都市が作られた。二〇世紀も後半から郊外に大学などが建設されるようになり、主要幹線道路の周辺に、次第に都市が拡大して、今日の広大なアンカラ市域となった。市内でも新市街区は大きく変化し、当初モスクは建設されなかったにもかかわらず、現在では巨大なコジヤテペ・モスクが目立ち、戸建ての庭付き住宅街が集合住宅になってしまい、官庁街も機能の拡大により、外務省など今まで郊外とされていた地区に続々と移転拡大している。

オスマン時代末期のアンカラ州知事府が発行した一三二五年（西暦一九〇七年）版年報（サルナーメ）を参考にすると、ルーム・セルジューク朝時代からオスマン朝末期までアンカラの町はほとんど大きな変化なしに、今は跡形もない市壁の内側にこじんまりとした町であったようである。

（本学文学部教授）